

Murder in the Madhouse  
1935  
by Jonathan Latimer

目次

精神病院の殺人

7

訳者あとがき 318

解説 笹川吉晴 321

## 主要登場人物

ウイリアム(ビル)・クレイン……………私立探偵

ドクター・リバーモア……………サナトリウムの院長

ドクター・イーストマン……………医者

ドクター・ビューロー……………医者

ミス・エヴァンズ……………看護師長、金髪美女

ミス・クレイトン……………看護師、黒髪

ミス・ツイリガー……………看護師、大柄

キャンベル……………運転手

ジョー・カスツチオ……………使用人

チャールズ……………警備員

アンドリュース……………警備員、老人

ピーター・ウォルターズ……………保安官

クリフ・ウォルターズ……………保安官の息子

〈入院患者たち〉

- ミス・ヴァン・キャンブ……………老婦人、私物を盗まれたと執拗に訴える
- ミス・ネリー・バクストン……………老婦人、ミス・ヴァン・キャンブの友人
- ミス・クイーン……………イギリスの元コメデイ女優
- ミセス・ヘイワース……………美しい女性、哀れそうな面影
- ミセス・ブレイディー……………豊かな女性、陽気
- ミスター・ピッツフィールド……………弁護士、自分はリンカーンだと思い込んでいる
- ミスター・リチャードソン……………中年男性、ミセス・ヘイワースを崇拜している
- ミスター・ブラックウッド……………大柄な男、ピッツフィールドを毛嫌いしている
- ミスター・ペニー……………小柄な男、一切口を利かない
- ミスター・ラダム……………満月の晩に、オオカミ男に変身する
- ミスター・ウィリアムズ……………電気技師
- ミスター・トム・バーンス……………新聞記者

精神病院の殺人

「冷酷無比な殺人者が私設サナトリウムの中をうろついていた。三人を殺し、まんまと逃げお  
せるかと思われたが、庭の噴水が復讐の女神ネメシスとなって立ちはだかった」

## 第一章

夕暮れが近づいていた。丘陵地帯に少しずつ忍び寄る夕闇が窓のすぐ外まで迫っていたが、空気はまだ熱く乾いていた。コンクリートの舗道の継ぎ目のタールが黒くねっとり溶解出し、汚れた木々の枝から葉がだらしなく垂れ、干上がった野原に寝そべる動物たちが興味なさそうな目で道路を見つめている。救急車の中の空気も熱く乾いていた。浅い革張りのベンチに腰かけたウイリアム・クレインは、床の上の土埃の粒が車の振動で命を吹き込まれたかのように踊っているのを眺めていた。目的地はまだ遠いのだろうかと考えながら。

車はスピードを出して走り、彼の背後の汚れた窓の外では、まるで怒ったヘビがとぐろを解くように道路がくねくねと伸びていた。救急車が狂ったように大きく左右に揺れるたびに、エンジンの熱気が波となって車内に流れ込んでくる。運転席との仕切りパネルの隙間から虫が一匹飛んできて、ウイリアム・クレインの顔に当たった。払いのけようとして、両手の手錠を頭にぶつけて傷ができた。クレインが悪態をつくると、助手席の男が睨みつけてきた。「どうかしたか、ミスター？」

「虫がいた」ウイリアム・クレインが答えた。

運転手が声を上げて笑った。「虫バグつてのは精神病者バグに吸い寄せられるんだな」

助手席の男も一緒に笑った。ポケットの中を探って瓶を取り出すと、大笑いしすぎてあえぎながら

ごくりと飲んだ。続けて、瓶の口を運転手の唇にも押しつけた。救急車はふらふらと左の車線へはみ出し、鋭い音を立てて何かにぶつかって、すぐまた右側に戻った。対向車がかすめるようにすれちがい、怒声が遠ざかって行った。

「こいつはすげえ、上物じょうものじゃないか」運転手が言った。道路の後方を確認しようと振り向く襟元から、たっぷり肉のついた黒く汚れた首がちらりと見えた。

助手席の男が瓶をそっとポケットにしまった。動揺しているようだ。「今の車、間一髪だったぞ。すれちがいざまに、あいつのネクタイに噛みつくところだった」

「このぐらい、大したことねえよ」運転手がなだめるように言った。「暗くなったら赤色灯とサイレンをつけて、こいつのアクセルの威力を見せてやるよ」

「どこまで行くんだ？」クレインが尋ねた。

「これから週末をゆつくりと過ごしに、アスターのお屋敷まで行くんだよ」助手席の男が言った。肌が黒く、金歯が二本あり、キャップをかぶっている。名前はジョーだ。

「そうとも」運転手が言った。「お偉いさんビッグ・バグたちのパーティーに行くんだ」

その駄洒落に、またジョーが笑いだした。「ビッグ・バグだつて！」あえぎながら言う。「まったく、大笑いだ！」そのせいで、また瓶の中身を飲まずにはいられなくなった。運転手もひと口飲んだ。

救急車が左へカーブするたびに、ウイリアム・クレインには後ろの窓からハドソン川の黄褐色の川岸が見えた。秋が近づき、すでに木々の葉が茶色く染まり始めている。夕暮れの薄暗さと車のスピードのせいで景色がぼやけ、まるで列車の窓の外を風景が流れているように見せる舞台の道具のようだ。救急車が猛スピードで村の中を走り抜けていると、どこかで悲鳴のような声が上がった。後ろの

窓から、三人の若い娘の姿が見えた。

「あの子たち、乗せて行こうぜ」運転手が言った。

「だめだ、頭のいかれたのが乗ってるからな」

「いやいや、こいつなら大丈夫さ」運転手は愛情のこもった目をウィリアム・クレインに向けた。そのせいで、あやうく対向車のセダンを見落とすところだった。「おまえ、今まで救急車で女を引っかけたことないのか？」運転手がジョーに尋ねた。

ジョーは、救急車で女を引っかけたことはないと認めた。

「最高だぞ」運転手が熱をこめて言う。「どっかの木陰を探したり、ホテル代を払ったりしなくていいんだからな」

道路が丘のあいだの谷間を下ると、クレインはそこだけは空気がひんやりとしているのに気づいた。涼しさを再び味わうのは心地よかった。たとえそれがほんの一時いつとまだとしても。

「それに、何よりもいいのは」運転手の話はまだ続いていた。「女たちがどれだけ泣き叫ぼうと、誰も気に留めないってことだ。万一誰かに何か訊かれても、その女が精神病患者だって言えばいいんだから。簡単だろう」

運転手はまた瓶の口をくわえた。ジョーに返したときには、中身はほとんど残っていなかった。

「ガソリンを入れるついでに、そいつも補給したほうがいいな」運転手が言った。

「どこかあてがあるのか？」ジョーがシナモン味の液体を飲み干して訊いた。

「あるとも」運転手がきっぱりと言った。「リンゴ酒なら、たいていどこのガソリンスタンドでも手に入る。なかなかいい代物だぜ」

「これだつていい酒だぞ」ジョーが言った。「ダッチの組織から手に入れたんだ。混じりつけなしだ」  
「ダッチのどこじゃ、何でもかんでも薄めてるつて言うじゃないか」

「おれもダッチの手下なんだぜ」

運転手は感銘を受けた。舌と歯茎でチュッチュツと音を立てた。「ひゅー、すげえな！ いったいどうやってダッチと手を切つたんだ？」

「切つてない。ここのドクターから頼まれた仕事が終わつたら、また戻るんだ」

運転手は車を一マイル近く走らせるあいだじゅう、その情報について熟考していた。「おまえ、ダッチの下つて、どんな仕事を？」

ジョーは自分の左脇をぼんぼんと叩いた。

じきに辺りは真つ暗になつた。道端に木々が陰鬱そうに固まつて生えている。その隙間から明かりが見えた。電灯のきらめく橋がかつたハドソン川は、まるでダイヤモンドをちりばめたバックル付きの真つ黒いベルトのようだ。救急車は徐々にスピードを落としてのろのろと走つた後、道路脇の砂利道に入り、〈ブルー・ガソリン——十一セント〉という看板の前で停まつた。

運転手がエンジンを切ると、灰色の木造の掘立小屋のドアが開いて、死人のように青白い顔をした痩せた男が仕方なさそうに出て来た。噛み煙草をほおばつたままもごもごと言う。

「どのぐら入れる？」

「十ガロンほど頼む」運転手が言った。「オイルと冷却水のチェックもしてくれ」

ジョーは救急車を降り、ぎくしゃくとした足取りで小屋へ向かつた。中を覗いたものの、引き返して来て店員に何か話しかけた。

「小屋の裏には森が十エーカーもあるじゃないか」店員は憤慨した声で言った。「それで用は充分済むだろうか？」

ジョーは小さな目を泳がせるように、無関心に背を向けた店員の後姿を見つめながら、どうすべきか決めかねて立ち尽くしていた。だがついには十エーカーの森の中へ姿を消した。運転手が車を降りて、オイルレベルを測っている店員の様子を見に行ってしまうと、ウィリアム・クレインは手錠をはめた両手を頭の上に揚げた。革で覆われた鉄の輪が手首にこすれたが、体を伸ばすと、狭い座席に浅く腰かけたまま車の揺れをこらえていた筋肉の凝りがやわらいだ。運転席との仕切りパネルに近づき、外を見た。

店員がオイルゲージを見せている。「二ガロンほど要るな」無感情に告げる。

「それも入れてくれ」運転手が言った。

「この手の車はガソリンを食うよな」店員はぬるぬるした缶からオイルを入れながら言った。「これと似た別の救急車が、二週間に一度ぐらいここへ来るんだ。だいたいいつも十ガロンか五ガロン入れに行く」男はオイルの缶をエンジンの上にそっと置いて、背中を伸ばした。

「冷却水もチェックしてくれ」

ジョーがまばらに生えた藪から出て来て、スタンドのほうへゆっくりと戻って来た。「おれが見てるから、あんたも行ってきなよ」運転手に向かって言った。運転手はうなずき、森のほうへ歩きだした。足取りはよろよろとおぼつかない。

冷却水を入れ終えてラジエーターの蓋を閉めていた店員が、ふと仕切りパネルの奥にいるウィリアム・クレインに気づいた。手錠に目が留まると、目を丸くした。「あんたら、三人連れだとは知らな

かったよ」

ジョーが煙草に火をつけていた。「三人連れ？ ああ、そいつは数に入らないんだ。頭がいかれてるから」

店員がウィリアム・クレインの顔をまじまじと見た。「ちよつと見ただけじゃ、わかんないもんだな。こんなに若いのに。どう見ても、まだ二十代じゃないか。こつちの話は聞こえてるのかい？」

ジョーは、わからないと答えた。どうでもいいとも言った。

「まあ、聞こえてたところで、どうにもならないだろうがな。こういう連中には、頭がいかれてることを伝えてやるすべもないらしい。自分の頭がおかしいってことさえ認識できないって話だ」店員はウィリアム・クレインをじろじろ見つめたままと言った。

ジョーは道路の左右を見渡した。店員に顔を寄せる。「あんた、顔が広そうだな。どこかこの辺で、上質なやつが手に入らないか？」

店員は驚いた様子も見せず、探るような目でジョーを見つめた。

「小屋の中にあるかもしれないな」

「一クオート、いくらだ？」

店員は少し考えてから、反応を伺うように「二ドル」と提案した。

「じゃ、頼む」

店員が小屋に入ると、運転手が戻って来た。ジョーはリング酒のことを伝えた。

「あいつが自分で醸造した酒だぜ？」運転手が言った。

「誰が醸造しようとかまわさないさ、上質ならね」

## 本格マッドハウスの探偵たち

笹川吉晴（文芸評論家）

ニューヨーク郊外の谷間にひっそりと佇む精神病患者の療養施設<sup>サニタリウム</sup>。金持ちの入所者ばかりを集めたそこにまたひとり、新たな患者が担ぎ込まれた。名探偵<sup>ザホーム</sup>を自称するその男があちこち首を突っ込み何やら嗅ぎ回る中、奇怪な連続殺人が幕を開けようとしていた――。

というわけでジョン・ライターのウィリアム（ビル）・クレイン・シリーズがここに、遂に驚きの全作訳出を遂げた！ しかも満を持しての第一作『精神病院の殺人』*Murder in the Madhouse*（1935）である。本国での発表から八十余年、死体置き場<sup>モルグ</sup>から盗まれた美女の死体は、そもそも一体誰なのかを巡って争奪戦が繰り広げられる第三作『盗まれた美女』*The Lady in the Morgue*（36）による日本初登場（五〇年）から七十年近く、執行間近の死刑囚の無実を証すべく、密室殺人の謎を解こうと奮闘する第二作『処刑6日前』*Headed for a Hearse*（35）および『盗まれた美女』の新訳『モルグの女』を含むライター作品がまとめて紹介された六〇年代からでも半世紀以上を経た、ようやくシリーズが全作揃ったことになる。

ちなみにこの論創海外ミステリというなら二〇〇八年の初登場が、田舎町の実業家一族を巡る不審な自殺事件を調査するため、クレインが『夫婦探偵』となって潜入する最終第五作の『赤き死の香

り』*Red Gardenias* (39)、十年後(そい)から、若き富豪兄妹への不可解な脅迫が誘拐事件へと発展する第四作『サンダルウッドは死の香り』*The Dead Don't Care* (38)へと廻り、本書に至ってついに原点へと回帰するという3―2―5―4―1のまことに長く迂遠な道のりだったではないか。

このように同一作家やシリーズが順を追って紹介されない場合、後回しになればなるほど落穂拾いというか、後回しにされるだけの理由が……というのはよくあることだが、本作については心配無用。職人のイメージとは裏腹に寡作なことあつてか、ラティマー作品が常に一定以上の水準を保っていることは、この『精神病院の殺人』も同様である。いや、むしろ作家の全ては第一作にありと俗に言われる通り、本作にはその後、さまざまに趣向を凝らしながら展開されていくラティマーの作風が最も明快に現れている。

そして、もしこれが最初に紹介されていたならラティマーという作家の日本におけるイメージ、受容のされ方もいささか違っていたのではないかとさえ思えてくるのだ。

大方のミステリ・ファン(特に本格ミステリ・ファン)にとつてジョナサン・ラティマーの Paperback イメージは、ハードボイルド+本格風味<sup>〴〵</sup>といったところではないだろうか。つまりあくまでハードボイルドが主、本格ミステリ趣向は単なる味付け、あるいはプロット上の結果に過ぎないというわけだ。

それゆえハードボイルドと本格ミステリ両派の間にあつた深く暗い河に阻まれ、本格ファンはラティマーを、今ひとつ気を入れて読んでこなかったところがあると思う。ハードボイルドにしては本格趣向もあるけど、所詮は趣向止まりで軽いよね<sup>〴〵</sup>みたいに。

〔著者〕

ジョナサン・ラティマー

本名ジョナサン・ワイアット・ラティマー。アメリカ、イリノイ州シカゴ生まれ。ノックス・カレッジを卒業後、〈シカゴ・トリビューン〉紙で新聞記者として働く。1935年、私立探偵ビル・クレインが登場する『精神病院の殺人』で作家デビュー。シナリオライターとしても活躍。ダシール・ハメット原作の映画「ガラスの鍵」や、テレビドラマ「ペリー・メイスン」、「刑事コロンボ」の脚本を担当した。またピーター・コフィン名義での作品もある。

〔訳者〕

福森典子（ふくもり・のりこ）

大阪生まれ。通算十年の海外生活の後、国際基督教大学卒業。訳書に『真紅の輪』『厚かましいアリバイ』『消えたブランド氏』『ソニア・ウェイワードの帰還』（論創社）。

せいしんびょういん まつじん  
精神病院の殺人

——論創海外ミステリ 221

---

2018年11月20日 初版第1刷印刷

2018年11月30日 初版第1刷発行

著者 ジョナサン・ラティマー

訳者 福森典子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル  
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266  
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1772-9

落丁・乱丁本はお取り替えいたします